



高専入試 / 高専のための学習塾

# ナレッジスター

二〇二三年度高専入試対策

## 第五回 高専模試

### 国語

(配点)

①

12点

②

25点

③

33点

④

30点

(注意)

- 1 解答を戻す際には必ず画面下の「戻る」ボタンから戻るようにしてください。  
その他の方法で戻ってしまうと、今までの解答が消えたり、  
再度パスワードを求められる場合があります。
- 2 問題冊子は受験開始するまで開かないこと。
- 3 問題冊子には必要に応じて印刷し、手元において受験すること。
- 4 試験時間は五十分です。時間は自分で計って受験し、時間になったら解答を送信してください。
- 5 一つの解答欄に対して、複数のマークを塗りつぶしている場合は有効な解答にはなりません。
- 6 回答は、解答用紙の指定されたマーク欄にマークすること。  
指定されたマーク欄以外にマークしても有効な解答となりません。



1 次の(1)から(6)までの傍線部の漢字表記として適当なものを、それぞれアからエまでのの中から一つずつ選べ。

- |              |     |     |     |     |                 |     |     |     |     |
|--------------|-----|-----|-----|-----|-----------------|-----|-----|-----|-----|
| (1) 変化にトボしい。 | ア 貧 | イ 乏 | ウ 困 | エ 惑 | (2) 体制をカク新する。   | ア 核 | イ 角 | ウ 確 | エ 革 |
| (3) 不キユウの名作。 | ア 朽 | イ 旧 | ウ 急 | エ 及 | (4) テイ裁を整える。    | ア 定 | イ 提 | ウ 体 | エ 帯 |
| (5) 異ギを唱える。  | ア 義 | イ 疑 | ウ 議 | エ 技 | (6) 無シヨウに腹立たしい。 | ア 省 | イ 性 | ウ 証 | エ 相 |

2 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

旅。そして秋の夕暮れ。と言えば、多くの人は(ア)芭蕉を思い浮かべるでしょう。芭蕉のあの有名な句を。

《A》此道(一)や行人なしに秋の暮

だれも行く人のいない寂しい道を、秋の夕べ、ひとり歩んで行くという句です。此道(二)ということばの中には、もちろん俳諧の道という意味もこめられています。「ある時は(注1)仕官懸命の地をうらやみ、一たびは(注2)仏離祖室の扉(注3)に入らむとせしも、たどりになき風雲に身をせめ、花鳥に情を労して、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋につながる」(注3)幻住庵記(注4)という、その一筋の道を、芭蕉はただひとり歩みます。自分とて、あるときは仕官をして禄を食む生活をうらやましく思い、また、あるときは仏門に入ろうと思ったこともあった。が、そのどちらにもなりきれず、あてもない旅をつづけ、花鳥風月に心を奪われていくうち、いつか俳諧が生慌の糧のようにもなったので、

i、と言うのです。

しかし、そうは言いながらも、芭蕉にはiiがありました。俗世間の俗事に心をわずらわせている人たちに対して、苦しいけれど孤高に生きるという限りない誇りが。「幻住庵記」に記された前記の文章は、自嘲であるとともに、iiでもあったのです。こうして芭蕉は旅人になりました。

《B》旅人と我名よばれん初しぐれ

《C》年くれぬ笠着て草鞋はきながら

《D》旅に病で夢は枯野をかけ廻る

芭蕉の句のどれをとっても、旅人ならざる姿はなく、その旅人の姿は、そのまま求道者の姿でもありました。

(エ)蕪村はどうだったのでしょうか。彼もまた旅人であることを、はげしく願いました。彼は芭蕉を心の師と仰ぎ、芭蕉の死後百年足らずしてすっかり草におおわれてしまった(注4)蕉風の俳諧の道を、もういちど、もとに返そうと思っていたのです。彼は芭蕉の跡を慕って、奥羽行脚を試み、遠く陸奥の外ヶ浜まで苦しい旅をつづけています。

けれど、蕪村は、(エ)ついに芭蕉のように旅人に徹することはできませんでした。芭蕉は「無能無才にして」俳諧の道一筋につながったのですが、蕪村には、なまじ画才がありました。その画才のゆえに、彼は絵画の道と俳諧の道、二足の草鞋をはきつつけることになるのです。あるときは絵の道で大成したいと寒夜に絵筆の水を嚙み、あるときは俳諧に打ち込んで夜を徹して句作を試みます。が、結局、俳諧の道においては芭蕉におよばず、画業においては同時代の(注5)大雅に一步譲らざるをえませんでした。彼は四十歳半ばにして、旅人たることをあきらめ、妻をめとって京都に家を持ちます。やがてひとり娘くのが生まれます。蕪村は家庭の人となるのです。しかし、彼は家庭に埋没して俗世間に生きることができませんでした。画料によって生活はそれほど苦しくはなかったようですが、蕪村の心を常に領

していたのは、自分がついになりきれなかった旅人芭蕉の姿でした。

《E》<sup>(3)</sup> さみだれのかくて暮行月日かな

《F》冬ごもり壁をこころの山に倚<sup>よ</sup>る

《G》しぐるるや我も<sup>(4)</sup> 古人の夜に似たる

一日降りつづくさみだれ。そのさみだれの中を芭蕉は旅をしつつ「笠嶋<sup>じま</sup>はいづこさ月のぬかり道」と詠<sup>よ</sup>んだ。それなのに自分は、旅どころか世事に埋没して、あ、きょうもこんなぐあいに暮れていく、という述懐です。

(森本哲郎『ことばへの旅』より)

(注1) 仕官懸命Ⅱ官吏の職に就き、生活を支えること。

(注2) 仏離祖室Ⅱ禅門・仏門に入ること。

(注3) 幻住庵記Ⅱ江戸時代中期の俳文。松尾芭蕉作。作者が元禄三年(二六九〇)四月から八月中旬にかけて幻住地に住んだときの生活や感慨を記したもの。

(注4) 蕉風Ⅱ俳諧で、松尾芭蕉およびその一門の俳諧。それまでの滑稽を中心とした俳諧を自然詩まで高めた芸術性豊かな俳諧。

(注5) 大雅Ⅱ池大雅。江戸時代中期の画家。

問1 本文中に(a)芭蕉、(b)蕪村とあるが、それぞれの名前の組み合わせとして適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア (a) 松野芭蕉 (b) 与謝蕪村 イ (a) 松野芭蕉 (b) 与謝蕪村

ウ (a) 松尾芭蕉 (b) 与謝蕪村 エ (a) 松尾芭蕉 (b) 与謝蕪村

問2 本文中《A》の句の、「<sup>(1)</sup>や」は句中にあって余情を持たせたり、主題を強調したりする役割がある。このような語を何というか。その名称として適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア わび イ 切れ字 ウ 発句 エ 取り合せ

問3 空欄 i に当てはまる文章として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 才のない無能な人間だからこそ、俳諧の一筋の道につながれてしまった

イ 俳諧の才しかないわが身は旅一筋の道につながれてしまった

ウ 才もなく何一つできないわが身は旅一筋の道につながれてしまった

エ ほかに才もないわが身は俳諧の一筋の道につながれてしまった

問4 空欄 ii に当てはまる言葉として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 自負 イ 自愛 ウ 自衛 エ 自因

問5 本文中《D》の句から読み取れる作者の感情として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 夢がはかなく消え去ったために、旅先ですら落ち込んでしまっている。

イ 旅をしなければならないという思いが夢の中でも消えず、つらく思っている。

ウ 旅の途中で病に倒れながらも、なお病床で旅にそこがれを持ち続けている。

エ 旅先で病に苦しめられる夢を見て、早く出発したいと待ちきれなくなっている。

問6 本文中に、<sup>(2)</sup> ついに芭蕉のように旅人に徹することはできませんでしたとあるが、なぜ蕪村は芭蕉のようになれなかったのか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 芭蕉は俗世間に生きられず旅人に徹することができたが、蕪村は家庭を持ったため俳諧の道に徹することができなかったから。

イ 芭蕉は俳諧の才能しかなかったために旅人に徹することができたが、蕪村は画才によって俗世間に没落してしまったから。

ウ 芭蕉は俳諧の道一筋で旅人に徹することができたが、蕪村は画才があったために一つの道に徹することができなかったから。

エ 芭蕉は画才が無く旅人に徹することができたが、蕪村には画才も家庭もあり、一つの道を極めることができなかったから。

問7 本文中《E》の句の<sup>(3)</sup> さみだれは季語である。この季語が表す季節として適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 春 イ 夏 ウ 秋 エ 冬

問8 本文中《G》の句に、<sup>(4)</sup> 古人とあるが、この句での意味として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 古くからの友人 イ 亡くなった人 ウ 古い考え方の人 エ 昔の人

3 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

アメリカの文化人類学者エドワード・ホールは一九六〇年代に刊行した『沈黙のことば』（南雲堂）や『かくれた次元』（みすず書房）で、世界の文化別にコミュニケーションのスタイルを比較している。ホールは生涯をかけて、「他民族とはなぜ理解し合えないのか」を空間認識や人間相互の距離から考察した文化人類学者である。おそらく<sup>(1)</sup> アメリカ人はなぜアラブ人と理解し合えないのか、が彼の研究テーマの一つだったはずである。それは今もって解決されていない。

彼はコミュニケーションのスタイルによって、社会を大きく二つに分けている。「ハイコンテキスト社会」と「ローコンテキスト社会」である。

コンテキストという少し耳慣れない言葉は、「コミュニケーションのベースにある空間感覚やお互いの距離感、それをつなぐ言語」と考えればよい。

「ハイコンテキスト」コミュニケーションとは、コンテキストを共有する度合いが高いこと。論理的な言葉で客観的にいちいち説明しなくても、相手の意図を察し合い、お互いの意図を通じ合わせる文化のことである。

わかりやすく言えば、何十年も連れ添った夫婦は「ハイコンテキスト文化」を共有していると言えるだろう。たとえば夫が「おい」と言って顔を向けるだけで、妻は何も言わずに醬油の瓶を差し出すといった具合。ほとんど言葉以外の情報でお互いを察しあっている。

一方、「ローコンテキスト社会」は、言葉で厳密に限定し合う社会のことである。たとえば「ちょっと待ってくれる？」と言われた場合、日本人なら前後関係で「お

よそ、このくらいの時間」と思うが、それでは納得せずに何分待つのか、きっちり決めたがる社会と言ってもよい。いや、日本人でも若い人は、『ちょっと』って何分のことはつきり言ってくれないとわかりません」と言うかもしれない。こういう時に、年配者は「マニユアル世代は困る」と愚痴をこぼす。マニユアルとは言語情報のことだから、この愚痴はかなり本質を突いていることになる。

アメリカのような多民族国家はまさに「ローコンテクスト社会」である。話される言語にしても、共通語は英語であるが、もともと英語以外にフランス語、ドイツ語、スペイン語を話す人たちが集まり、アフリカの諸地域から夥<sup>おびただ</sup>しい種類のアフリカ系言語を話す黒人が加わってきたという経緯がある。後には、アジア諸国からも多数の人たちが押し寄せて「アメリカ人」になっていった。言葉以外にも、習慣や価値観、人生観、宗教観が異なる。可能な限り論理的に話し、語義の明確な言葉を連ねて、誤解の少ないコミュニケーション力を持った人が優秀な人ということになる。ダイベート力が大事で、交渉力はビジネスマンの重要な能力となる。

ホールのいう「ローコンテクスト社会」には、ドイツ、フランス、イギリスなども含まれる。これらの国は、民族は一つだが、隣の民族と戦<sup>いくさ</sup>を繰り返してきたために、「言うべきはきちんと言わなくてはならない」国ばかりである。<sup>(2)</sup> また、「個」を重んじる社会でもある。

一方、アラブ諸国や日本は「団体行動」を重んじ、「個」は軽い。仲間うちだと言葉で限定しなくても、何となく通じ合える部分が大きい(ホールがアラブ諸国を研究しているとき、ルース・ペネディクトの『菊と刀』が発表された。優れた日本人論が出てきたことで、ホールは日本への興味を膨らませたと思われる)。

ホールの指摘で嬉しいのは、世界中でもっとも「ハイコンテクストな社会」を日本としていることである。親日家でもあるホールは、日本人のコミュニケーションの特徴ともいえる「あうんの呼吸」「ツーカーの仲」などを、一九六〇年代の段階で日本人の美風として評価している。

## 【A】

その時代は、この種の日本人的なコミュニケーション、たとえば「ジャパニーズ・スマイル」は欧米のビジネスマンには、むしろ悪しき習慣とされていた。日本人は自分の意見をはっきり言うことはなく、曖昧な微笑でどっちつかずの態度をとる、と。日本のビジネスマンも、アメリカ流の交渉力、ダイベート力を身に付けて、国際人にならなくてはならないという意見は今でも根強い。

そんな時代にホールは、日本人のコミュニケーションの形を肯定的にとらえているのである。<sup>(3)</sup> ではなぜ、世界一の「ハイコンテクスト社会」ができたのかを私なりに考えてみたい。

徳川家康が江戸幕府を開いたのは一六〇三年のこと。以降、諸大名は参勤交代で、本国と江戸を行き来する時代が二百年以上も続いた。中央集権体制ではあるが、それぞれの国は独立しているので、連邦政府ともいえる。どの殿様にも江戸詰めがあり、お互いの価値観を認め合わなくてはやっていけない。したがって方言は残っても、十七世紀の段階で共通語が安定していく。また、参勤交代があったために、江戸で栄えた文化が、日本中に流通していった。

## 【B】

同じ時代、欧米の先進国は植民地争奪戦の真っ只中であつた。言語・価値観のまったく異なる民族を従わせなくてはならない。言葉の障害だけでも膨大にあり、言語によるコミュニケーションに力を割かなくてはならなかった。

日本は東洋の端っこにある島国だったために、二百六十年もの間、戦争をすることなく、文化をゆつたりと発酵させていった。言葉を尽くさなくても、アイ・コンタクトで通じ合う。表情やアクションも、細やかでなおかつ高度化していったのではないか。もちろん、他にもいろいろな要因があるのだろうが、私は江戸時代が「ハイコンテクスト社会」の形成に大きな影響を与えたのではないか、と考えている。

私たちは「空気を読む」という言葉をよく使う。「空気を読む」とは、どういう行為なのか――。その場にいる数人が、お互いの眼や表情の変化、小さなアクション

ンの変化を、細やかに感じ、お互いの意思を通じ合わせて、「その場の世論」のようなものを形成していく技術のことである。これこそハイコンテキスト社会である。空気それ自体に文字が書いてあるわけでもなく、バーコードが付いていることもない。物理的に「空気を読む」ことはできない。その場にいる人々の、細やかな表情の変化、こぶしの動きなどが総合的な「流れ」となって、「空気」をつくっていく。

## 【C】

とはいえ、日本人同士でも、就職試験の面接や初対面の相手などコンテキストが異なる人とコミュニケーションしなくてはならない。学生時代の友人や職場の仲間とは「ハイコンテキスト」コミュニケーションでよいが、外国人や社外の人とは「ローコンテキスト」コミュニケーション、と使い分ける意識が必要だろう。

日本的な言い方をすれば、「公」と「私」の使い分けができる人間になろう、ということになる。友人が相手なら「ちょっと遅れる」でいいが、取引先の人だと「十五分遅れます」ときちんと言わなくてはならない。

ホールの指摘が画期的だったのは、ハイコンテキストとローコンテキストに優劣をつけていない点である。私たちは、つつい身振り手振りが大きい人のほうを「非言語コミュニケーションに長けている」と感じてしまう。でも、そんな単純な話ではありませんよ、とホール先生は教えてくれている。

実はこのあたり、<sup>(4)</sup>私も勘違いしていた時期がある。

非言語コミュニケーションの研究では、アメリカが世界の最先端を走っている。日本で、この分野の研究に多額の研究費を割いている大学は皆無だといっていい。そのため、私は非言語コミュニケーションそのものの先進国もアメリカである、という思い込みを持ってしまったのだ。

しかし、実際にはそうではない。

アメリカは多言語民族国家だから、言語の習得も大事だが、非言語コミュニケーションについても意識的でないといけない。私たちが外国を旅行するとき、言葉が通じなければ、身振り手振りで何とか意思を伝えようとするが、それが常態の国なのである。かくして、非言語コミュニケーションも含めた自己表現能力は重要な能力となる。

## 【D】

<sup>(5)</sup>アメリカの名門私立大学の多くには演劇学科が設置されている。日本の地方国立大学に相当する州立大学も同様のようだ。

そんなに皆がスターを目指しているのか。そうではない。へ a ヽ俳優を目指す人もいるのだが、実はビジネスマンになる人がほとんどである。といっても夢がかなわなかったからではない。アクションによる表現は、社会人として大事な能力である。そう考えているから、日本人が法学部や経済学部に進む感覚で演劇学科に入ってくる。

日本では法学部に入っても司法試験を受験する人はそう多くはない。建前としては、法律を通じて社会の仕組みを学び、社会人として優れた教養を身に付けるという目的の人がほとんどである。

アメリカの大学で演劇を専攻する学生たちの目的も、それと同じようなものだ。演技(アクション)はコミュニケーションの重要なツールであり、社会人として求められる能力だと考えているのである。

日本の場合、演劇を専攻できる大学は十校程度しかない。それだけしかアクション教育・研究に税金を使っていないのに、国内のコミュニケーションが成り立っているということは、アメリカ人からみると奇跡的な状態かもしれない。

コミュニケーションに労力を割いてきたアメリカでは心理学も盛んだ。そうした土壌から、非言語コミュニケーションという専門分野が発達したのは当然のこと

である。こうなると非言語コミュニケーション関連の文献はアメリカのものばかりということになる。

へ **b** 日本で非言語コミュニケーションを心理学的に研究しようとしても、難しいのではないか。たとえば、認知心理学では人間が外的な刺激を受け取ったときに、瞳孔の大きさの変化、<sup>まぶた</sup>瞼や眉の動きを計測しようとする。日本人は表情の変化が小さいので、機械で計測できるほどののはっきりした差は出にくいのではないか。

たとえば、家に帰ってみると、愛車は何者かによってバラバラに解体されていた、とする。アメリカ人なら、「オー・マイ・ゴッド」と言うだろう。日本人なら「ああ、なんてこった」と思う。

アメリカ人は、そういうとき上を見上げ、眉毛が上がり、口も大きく広がり、まいったなという顔になり、両手を広げ、手の平が上を向く。しかし、「ああ、なんてこった」と思う日本人には、ほとんど見た目の変化は無い。絶句して佇<sup>たなず</sup>むのみである。これでは実験しても計測が難しい。

へ **c** 研究が進んでいることと、実態とが同じではないの言うまでもない。また、大げさな身振り手振りが常態化していることが、そのまま非言語コミュニケーションに長けていることを意味するわけではない。むしろハイコンテキスト社会のほうが、その構成員たちの非言語コミュニケーション能力は高い、という見方も成立する。「ハイコンテキスト」「ローコンテキスト」という分類は、そのことを示しているのだ。

(竹内一郎『やっぱり見た目が9割』より)

問1 空欄へa、へb、へcに入る語として最も適当なものを、それぞれ次のアからエまでのの中から一つずつ選べ。ただし同じ語は二度入らない。

ア そのため イ そもそも ウ もちろん エ しかし

問2 本文からは次に示す文章が脱落している。**【A】**から**【D】**のうち補う箇所として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ほぼ同じ日本語を全国で共有できていたので、基本的にコミュニケーションのうえで、言葉は障害にならなかった。このことは、かなり特異であったと思う。

ア **【A】** イ **【B】** ウ **【C】** エ **【D】**

問3 本文中に、(1) アメリカ人はなぜアラブ人と理解し合えないのかとあるが、このような疑問が生まれるのはなぜか。その理由と考えられる事柄として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア アラブ諸国では言葉以外の情報でお互いを察しあうのに対し、アメリカでは「アメリカ人」であることの重要性が問われるから。

イ アラブ諸国では仲間うちでなくとも相手の意図を察するのに対し、アメリカでは誰にでも論理的に言葉で説明しなければならぬから。

ウ アラブ諸国ではお互いの意図を察して通じ合わせるのに対し、アメリカでは誤解の少ないコミュニケーション力を持つことが必要だから。

エ アラブ諸国ではどっちつかずの態度をとる悪しき習慣が横行しているのに対し、アメリカでは交渉力<sup>あらかじ</sup>が予め備わっている人がほとんどだから。

問4 本文中に、<sup>(2)</sup> また、「個」を重んじる社会でもあるとあるが、ヨーロッパ社会にまつわる次の文章を読み、本文も踏まえながら、ヨーロッパが「個」を重んじる社会となった理由として最も適当なものを、アからエまでの中から一つ選べ。

さまざまな民族や文化がせめぎあいながら国家というものを形成してきたヨーロッパでは、<sup>(注1)</sup> 個人主義や<sup>(注2)</sup> 近代的自我といった言葉が生まれる以前から、大勢の人間のなかで埋没<sup>まいぼつ</sup>してしまわないため、生き残っていくために、自分を主張することが求められてきたのでしよう。さらに近代に入ると、それぞれ「個」として自立した人間同士が互いの意見や好みを主張しあって相互理解を深めていくことで人間関係が成立するのだという考え方が、欧米人のベースとなっています。

<sup>(注3)</sup> 先ほど、統合失調症の人の訴えが日仏で違うという話をしました。日本で「みんなと違ってしまった」と悩む患者さんを見慣れていた私は、フランスの患者が「自分の個性が失われ、人と同じになってしまった」と嘆くのを聞いて、最初、奇異に感じたものでした。しかし、その違いはまさに、彼らとわれわれの「個」に対する考え方、対人関係のあり方が顕著にあらわれたものだったのです。

(加賀乙彦『不幸な国の幸福論』より)

(注1) 個人主義＝集団よりも個人に価値をおく考え方。(注2) 近代的自我＝理性的な「わたし」。

(注3) 先ほど：＝本文直前をふまえた記述。なお、筆者は精神科医であり、「統合失調症」は精神疾患の一種。

ア ヨーロッパでは個人主義や近代自我という言葉が生まれる前から戦を繰り返してきた背景があり、自分の意見を主張しなければ他者と足並みがそろわないと考えられてきたから。

イ ヨーロッパでは近隣民族と戦を繰り返しながら国家を形成してきた背景があり、個性が発揮されるよう自分の意見を主張することで人間関係が成立すると考えられてきたから。

ウ ヨーロッパでは戦によって個性が失われてきた背景があり、人によって異なる「個」や対人関係のあり方について自分の意見を主張することで相互理解すべきだと考えられてきたから。

エ ヨーロッパでは文化の違いによって近隣民族で戦を繰り返してきた背景があり、相互理解のためには異なる意見を敢えて伝えることで闘わせる必要があると考えられてきたから。

問5 本文中に、<sup>(3)</sup> ではなぜ、世界一の「ハイコンテクスト社会」ができたのかとあるが、筆者の考えた答えとして最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 日本は江戸時代の参勤交代によって全国で共通語が定着しており、言語コミュニケーションにおいて障害がなかったから。

イ 日本は江戸時代の参勤交代によって江戸で栄えた文化が流通しており、他の国々との価値観もある程度統一されたから。

ウ 日本は島国であったために身近な人々以外と交流する必要がなく、それによってアイ・コンタクトが発達したから。

エ 日本は島国であったために長い間他の国と戦争をすることがなく、その間に独自の文化を定着させることができたから。



問6 本文中に、(4) 私も勘違いしていたとあるが、どのように勘違いしていたのか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 非言語コミュニケーションの研究が発達しているアメリカが最も非言語コミュニケーションに長けていると考えていた。

イ 非言語コミュニケーションそのものの先進国であるアメリカが最もその分野の研究に費用を割いていると考えていた。

ウ ローコンテクスト社会であるアメリカだからこそ、非言語コミュニケーションの先進国も兼ねているものと考えていた。

エ 頻繁に非言語コミュニケーションを用いるアメリカの方が、ハイコンテクスト社会である日本よりも優れていると考えていた。

問7 本文中に、(5) アメリカの名門私立大学の多くには演劇学科が設置されているとあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア アクシオン教育に税金を投じることで国内コミュニケーションがより活発化され、最終的には国家としての発展に貢献するから。

イ 現代社会では非言語コミュニケーションを含めた自己表現力が求められており、演技を学ぶことで社会に適した能力が培われるから。

ウ 日本で法学部に入って司法試験を受けない人がいるのと同じように、建前上、ビジネスマンの素養を身に付ける目的として学ぶ人が多いから。

エ 皆が俳優を目指しているわけではないが、セカンドキャリアとしてビジネスマンを考える人たちにとって有利な能力が身に着くから。

4

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

戦後もない昭和二十三年の夏。鍛冶職人の能島六郎は一人の小学生由川浩太と出会う。ちょうど夏休みの期間中、浩太は毎日のように六郎の職場を訪れて熱心に見学するうち、鍛冶屋の仕事に興味を持ち始める。ある日浩太は六郎に、中学には行かず六郎の仕事を継ぎたいと告げた。六郎は内心うれしく思うが、後日六郎を訪ねてきた浩太の母から、浩太に鍛冶職人になるのを諦めるように説得するようもちかけられ、激怒して母を追い返してしまう。その数日後、六郎はある思いを持って、浩太を鍛冶の神様が祀られる金屋子神社のある山へ連れていくことにした。

神殿に続く階段を上りながら、六郎は(注1)あの時のことを思い出し、自分でも大人げないことをしてしまったと苦笑いをした。

「親方、ここは何という神社なんですか」

「金屋子神さんが祀ってある神社じゃ」

「かなやごさん？」

「そうじゃ、ほれ、あそこに書いてあろう。坊は勉強がようできるから読めるじゃろう。かなやごさんは鉄を造る神さまじゃ」

浩太は社の上方に掲げてある古い文字を読んでいた。「金屋子神」と記してある。

「わしが坊と同じ歳の頃、わしの親方がここに連れてきてくれて、ここで立派な鍛冶職人になれますようにと祈ってくれた。そうして生涯無事に鍛冶の仕事をやり通せたら、その時にまた礼を言いにこいと教えられた……」

「ふうーん、鍛冶屋の神様がちゃんといるんですね」

そう言って浩太は本殿にむかつて両手を合わせ神妙な顔をして目を閉じた。六郎も浩太の横に並んで手を合わせた。

「鍛冶屋さんは皆この神様に守ってもらっているのですか」

「他の土地の鍛冶職人がそうしとるかは知らんが、この地方では鍛冶職人はかなやごさんを大切にしとる。人の力でできることなどたいしたことではないからう」

「そうなのですか……」

「いや、そう親方がわしにここで言うた。その言葉の意味がこの歳になって少しわかった気もする」

六郎はそう言って、頭を掻きながら本殿を見直した。

五十数年前に親方と並んで見た折の、あのひんやりとした風が抜けていくような本殿の印象はそのままだった。

——わしは何も成長しておらんということかもしれんな……。

六郎は胸の奥でつぶやいてから、隣りで本殿を見上げている浩太の横顔を見た。

二人は参拝を済ませると、神社を出て（注2）山径に入った。ほどなく地面を揺らすような水音が聞こえてきた。真砂の滝の水音だった。

常緑樹が（注3）隧道のようになった山径を抜けると急に視界がひらけて、そこに霧のような水煙がかかっていた。冬の陽に水煙はきらきらとかがやき大きな光輪が浮かび上がっていた。その光輪のむこうに数段にわたって水を落とす真砂の滝が見えた。

ワァーッと浩太が声を上げた。走り出そうとする浩太に六郎が声をかけた。

「走ってはならんぞ。足元は苔が生えて滑るでな」

六郎は浩太と並んで真砂の滝を仰ぎ見た。

耳の底から親方の声が聞こえた。

『ロク、この水が鍛冶の神様や。よう覚えとくんや』

やさしい声だった。六郎は親方にそう言われた日がつい昨日のように思えた。

二人は滝の中段と同じ高さの岩場に腰を下ろして（注4）トヨがこしらえた弁当を食べはじめた。山径を歩き続けたせいにか、浩太はよほど腹が空いていたとみえて勢い良く弁当を平らげていく。

六郎は先刻、神社で手を合わせていた浩太の姿を思い出していた。浩太は金屋子の神様に何を祈ったのだろうか。もし浩太が金屋子の神様に自分も立派な鍛冶職人になれるように祈っていたとしたら、六郎が今日、浩太に話して聞かせようとしていることを彼は聞き入れてくれない気がした。浩太を説得してくれと担任の先生から頼まれ、それを承諾した六郎が浩太に対して（1）説得とはまったく逆の行動をしている。六郎はどうしたものかと滝壺を見た。

須崎という名前の若い男性教師の顔が滝壺の水面に浮かんだ。

十二月になったばかりの夕暮れ、須崎は六郎の鍛冶場に訪ねてくると、仕事場をぐるりと見回して懐かしそうに言った。

「いや懐かしいですね。私、生まれ育ったのが（注5）出雲の佐田町という山の中でしてね。そこに山村の鍛冶屋が一軒あって、職人さんが一人で毎日金槌を打っていました。私、子供の時分、その仕事を見るのが好きで、一日中眺めていました。山で働く人には必要ないろんな道具をこしらえていたんですよ」

「ああ、知っておる。わしの兄弟弟子の一人が山鍛冶職人になったからの。あんたは浩太の担任の先生ですか。(2) あんたがわしの所に来なさった用件はわかっています」

「いや能島さん、違うんです。私は浩太君に鍛冶屋になる夢を捨てるとは一度も言っていない。鍛冶屋さんはいいい仕事だと言いました。鍛冶屋は人間が最初に作った職業のひとつだと教えたんです。浩太君が鍛冶屋になりたいと言いだしたのは私のせいでもあるんです……ですから私の話を聞いて貰いたいです。浩太君は能島さんの話なら耳を傾けてくれます。あなたのことを本当に尊敬しているんです」

須崎という教師の話には説得力があった。

その翌日、須崎に連れられて浩太の母が神妙な顔をしてあらわれ、先日の非礼を詫び、息子を説得して欲しいと頼みにきた。

「ともかく話してみましよう」

六郎は二人に約束した。

承諾はしたものの、口下手な六郎の説得をあつ純粹無垢な浩太が聞き入れてくれるとは思えなかった。進学した方がおまえのためだと話せば話すほど浩太は自分に裏切られたと思うに違いない。六郎は考えた。妙案など浮かぶはずはなかった。考えた末、六郎が出した答えは彼がかつて少年の時、親方が彼に鍛冶職人がいかに素晴らしい職業かを教えてくれた、あの山径に二人で出かけ、親方が言ったことと同じ話をしてみようということだった。それは説得とはまったく逆の話なのだが、六郎は自分ができる唯一の方法だと思った。

昼食を終えて二人は岩の上で少し昼寝をした。

六郎は眠れなかった。胸元で浩太の寝息が聞こえた。

六郎の胸の上に浩太のちいさな指がかかっている。いつかこの指が大人の男の指になるのだろうと思った。その時は自分はこの世にいない。浩太がどんな大人になるか見てみたい気がする。(3) 六郎は独りで生きてきたことを少し後悔した。

——いや、そのかわりにこの子に逢えた。

親方の言葉がまた聞こえてきた。

『玉鋼と同じもんがおまえの身体の中にもある。玉鋼のようにいろんなもんが集まって一人前になるもんじゃ。鍛冶の仕事には何ひとつ無駄なもんはない。とにかく丁寧に仕事をやっていけ』

親方の言葉が耳の底に響いた。

玉鋼は鋼の最上のものである。ちいさな砂鉄をひとつひとつ集めて玉鋼は生まれる。親方はちいさなものをおろそかにせずひとつひとつ集めたものが一番強いということを少年の六郎に言っている。その時は親方の話の意味がよくわからなかった。それが十年、二十年、三十年と続けて行くうちに理解できるようになった。(4) 一日一日も砂鉄のようなものだったのかもしれない……。

浩太が目覚めた。

「浩太、鋼は何からできるか知ってるや」

「鉄鉱石」

「そうじゃ。他には」

浩太が首をかしげた。

「ならそれを見せてやろう。靴を脱いで裸足になれ」

六郎は浩太を連れて滝壺の脇の流れがゆるやかな水に膝まで入り、底の砂を両手で掬い上げた。そうして両手を器のようにして砂を洗い出した。浩太は六郎の大きな手の中の砂をのぞきこんでいる。やがて六郎の手の中にきらきちと光る粒が残った。六郎は光る粒を指先につまんで浩太に見せた。

「これが砂鉄じゃ。この砂鉄を集めて火の中に入れてやると鋼ができる」

「ぼくにも見つけられますか」

「ああできるとも。やってみろ」

浩太はズボンが濡れるのもかまわず水の中から砂を掬い上げると両手の中で洗うようにした。浩太のちいさな手に砂鉄が数粒残った。

「あつた、あつた。砂鉄があつた」

浩太が嬉しそうに声を上げ、六郎を見返した。

「それは真砂砂鉄と言う一等上等な砂鉄じゃ。このあたりにしかない。かなやごさんがこの土地に下さったもんじゃ。その砂鉄をあの岩ほど集めて、これだけの玉鋼ができる」

六郎は先刻まで二人が座っていた大岩を指さし、両手で鋼の大きさを教えた。

「あの岩ほど集めて、それだけの鋼しか取れないんですか」

「そうじゃ。そのかわり鋼を鍛えて刀に仕上げればどんなものより強い刀ができる。どんなに強い刀も、この砂鉄の一粒が生んどる」

「なら砂鉄が一番大事なものですね」

「そうじゃ。砂鉄はひとつひとつはちいさいが集まれば大きな力になる。この砂鉄と同じもんが、浩太の身体の中にある」

「ぼくの身体の中に……」

「どんなに大変そうに見えるもんでも、今はすぐにできんでもひとつひとつ丁寧に集めていけばいつか必ずできるようになる。わしの親方がそう言うた」

「ぼくも、ぼくの親方のようにいつかなれるんですね」

「……」

六郎は浩太の言葉に（あ）口ごもった。

「浩太、わしだけがおまえの親方ではない」

「どうしてですか。ぼくの親方はあなただけです。親方だけです」

浩太の顔が半そをかきそうになっていた。六郎は浩太の頭を撫でた。

二人は滝を離れると、（注）青煙の中腹まで登った。そこから中国山地の美しい眺望をひとしきり眺めて下山した。

登山口のバス停で二人は並んでバスを待った。六郎はバスのくる方角を見ていた。

「<sup>⑤</sup>親方、今日はありがとうございました」

浩太がぼつりと言ってお辞儀をした。

「どうしたんじゃ急に、礼なぞ（b）水臭い」

六郎はうつむいている浩太を見て、思い出したようにポケットの中を探った。そうしてちいさな石を浩太に差し出した。

「滝のそばで拾うた。みやげに持って行け」

それは鉄鉱石だった。浩太は石をじっと見ていた。

「いつかおまえが大きゅうなったら、この山をもう一度登るとええ。その時は誰かを連れて行って、あの滝を見せてやれ。山も滝もずっと待ってくれとる。きつとおまえは……」

六郎が言いかける前に浩太が六郎の胸に飛び込んできた。鳴咽<sup>おえつ</sup>が聞こえた。しがみついた手が震えていた。オ、ヤ、カ、タ……。途切れ途切れに声が聞こえた。

——この子は今日の山登りを何のためにしたのか、初めっからわかっていたのかもしれない。

そう思うと泣きじゃくる浩太の背中のかくらみがいとおしく思えた。

（伊集院静『親方の神様』より）

（注1）あの時〓浩太の母を追い返したときのこと。

（注2）山径〓山の小道。

（注3）隧道〓地中に掘った道路。トンネルのこと。

（注4）トヨ〓六郎の食事の世話をしている人物。

（注5）出雲〓島根県出雲市。

（注6）青煙〓峠の名称。

問1 本文中の、（a）口ごもった、（b）水臭い、のここでの意味として最も適当なものを、それぞれ次のアからエまでの中から一つずつ選べ。

a ア 言いたいことを飲み込む      イ 話を途中でさえぎる      ウ 言葉や声がぼんやりする      エ 言うのをためらう

b ア よそよそしい      イ まどろっこしい      ウ もどかしい      エ いぶかしい

問2 本文中に、（1）説得とはまったく逆の行動をしているとあるが、六郎は具体的にどのような行動をしたのか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 進学した方が浩太のためだと、口下手な六郎が浩太に話し、あえて反発させるよう仕向けること。

イ 須崎と浩太の母の考えを退け、鍛冶職人となるための儀式をして浩太を試そうとしていること。

ウ 須崎も本当は浩太に鍛冶職人になってほしいのだと理解し、浩太に鍛冶職人は素晴らしいと伝えること。

エ かつて六郎が親方に立派な鍛冶職人になれるようにと連れてこられた場所に、浩太を連れていくこと。

問3 本文中に、（2）あんたがわしの所に来なさった用件はわかっていますとあるが、この時六郎が依頼されると考えていた用件とはどのようなものだったか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 六郎が、浩太の母と浩太の間に起きた喧嘩<sup>けんか</sup>の仲裁に入ること。

イ 六郎が、須崎と浩太の間にできたわだかまりを解消すること。

ウ 六郎が浩太に、鍛冶職人をあきらめるよう言い聞かせること。

エ 六郎が浩太に、須崎が浩太の味方であると伝えること。

問4 本文中に、(3) 六郎は独りで生きてきたことを少し後悔したとあるが、なぜそのように感じたのか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 浩太に愛情が芽生えたことで浩太が一人前になることに期待を覚え、絶えず成長を見届けられる我が子という存在にあこがれを持ったから。

イ 浩太と日々長い時間を共にしてきたことで、これからまた一人で生きていくことに対して不安を覚え、家族という存在にあこがれを持ったから。

ウ 浩太の成長を我が子のように感じるようになったことで、これまで一切抱くことのなかった結婚というもののあこがれを持ったから。

エ 一人で生きてきた六郎にとって浩太は初めて自分を頼ってくれた存在であり、人を助けながら生きる人生にあこがれを持ったから。

問5 本文中に、(4) 一日一日も砂鉄のようなものだったとあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 一つ一つは小さいが、たくさん集めれば将来の道はおのずと決まるということ。

イ 一つ一つは小さいが、積み重ねていけば大きな力となり、大成できるということ。

ウ 一つ一つは小さいが、正しいものを集めることができれば、必ず成功するということ。

エ 一つ一つは小さいが、選別して積み重ねれば、健康で丈夫な身体が手に入るということ。

問6 本文中に、(5) 親方、今日はありがとうございますとあるが、なぜ浩太はお礼を述べたのか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 六郎が浩太の将来を考え、一つでも新しい知識を伝えようとしてくれたことがわかったから。

イ 進学しても夢をあきらめなくて良いと、六郎に背中を押されたように感じたから。

ウ 六郎は周囲に気付かれないよう配慮して、鍛冶職人としての心構えを教えてくれたから。

エ 六郎の言葉は浩太自身を成長させるものであり、浩太のことを思う気持ちに汲み取れたから。

問7 本文の表現の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 「幼い浩太の成長」という主題と共に、もう一つの主題として六郎自身の成長も描かれている。

イ 浩太と六郎を対照的に描きつつ風景描写を多用することで、隠れた共通点を浮かび上がらせている。

ウ 浩太の成長を心から願う六郎の心情を、会話を多用しながら細やかに描かれている。

エ 六郎の回想を文中に挟み込むことで、悩み揺れ動く六郎の心情が的確に描かれている。